Vol.27

まるとみ新聞

newspaper
'12 Dec.

発行所
北九州市若松区本町1-1-33
丸富産業（若松区役所前）
TEL093-751-1081

すまい de スマイル
12年12月号

住まいの歴史 HISTORY OF LIFE

住まいづくり。「後悔」の1位は、窓。

「後悔先に立たず」、家は、後悔しないで建てましょう。

家を建てた後、後悔したことベスト1は、窓の設置について。とは言っても「窓をもっと大きくすればよかった」ではなくて、その逆。「窓が大きすぎた」「窓が多すぎた」という後悔のようです。でも、その気持ちはよくわかりますよね。誰だって光と風があふれる爽やかな生活を求めて、窓を多く設置しがちですよね。でも、あまりに「明るいお部屋づくり」を意識しすぎたばかりに、結果として窓が邪魔になって家具の置けない部屋になってしまい、後悔するというパターン。生活がスタートしてみて始めてその不便さに気づくということらしいですね。もちろん、その一方で、それまで西日に泣かされ続けた人は、窓を小さくとるという傾向もあるようですが。

「窓」と聞いて、松山千春をイメージした人は、アラフィフの方ですね。

「引き違い窓」が「勘違い窓」に。

窓と聞いてまず皆さんがイメージするのは、左右2枚のガラス戸をスライドして開閉するタイプの「引き違い窓」でしょう。住宅などでは最も一般的に使われていて、コストも安くできます。でも、どこの窓もこのタイプにするというのはどうでしょう。例えばお風呂場のような小さな窓。窓の幅はわずか40センチほどです。そこに「引き違い窓」を使うと、やたらサッシのフレーム部分が目立つ格好の悪い窓になります。コストも大事ですが、夢のマイホームは見た目にもこだわりたいですね。

窓は、自然をコントロールする装置です。

家を設計する際、窓のサイズや取り付ける位置を考えるのは、意外と大変な作業。季節によって日光の入り方は異なりますし、隣家との窓の位置関係やプライバシーの問題、景観など、考えなくてはいけないことが沢山あります。

だからという訳ではありませんが、最近増えたのが大開口の窓の家です。壁一面が窓、バルコニーが全面サッシといった例も少なくありません。しかし、「窓が広い＝開放的」とは一概に言い切れません。特に都市型の住宅の場合は要注意です。プライバシーが守れなかったり、西日が入ってくると、結局はブラインドやカーテンで閉め切ることになりがちだからです。適切な場所に、適切な大きさの窓があることが大切です。

窓について皆さんに覚えておいて欲しいのは、「窓は日光や景観、風などを上手にコントロールする装置」だということです。

トコロ変れば

ドイツ　シャワールームのメタルちくわ。

海外でも足湯を楽しみたい人に最適なバスグッズですね。

お風呂文化は日本だけのものではありません。古今東西を問わず人間はお風呂が大好き。それが宗教、近代化、気候等々さまざまな要因が絡まり合って、「風呂＝体の汚れを落とす場所＝シャワーで充分」という国と、日本のように「風呂＝疲れを取る場所＝浴槽が必要」という習慣に分かれていったのです。でも、日本のように風呂をリラックス・スペースととらえている国は稀で、バスルームはシャワーだけという国が圧倒的に多いようです。そうした日本人が海外のアパートで暮らすことになったら、やはり気になるのがバスルームのこと。トイレと洗面所がついただけの簡単なシャワールームだとかなり落胆しそうですね。そんな時、日本人を少しだけニッコリさせてくれそうなものをドイツの温泉保養地で発見したのでご紹介します。それは金属製の「ちくわ」を思わせる筒型の物体で、これがあれば手軽に足浴が楽しめるというスグレモノなのです。仕組みはこうです。

この「ちくわ」を浴槽の栓として使うことで15㎝ほどの深さでお湯を張ることができ、栓の高さを超えた余分なお湯は筒状の穴から排水溝へと流れ出る仕組みなのです。安アパートの栓のないシャワールームでも、ゆったり気分で日本式の足湯が楽しめますね。

すまいる家族（はればれ）

なるほど 日本家屋 ～調査その⑤～

「京間の寸法」を共有して、リサイクル。

無駄のなさの中にエコの精神が息づいてるね。

日本家屋の部屋は「京間」と呼ばれる寸法を基準として作られています。その寸法は一枚の畳が、6.3尺×3.15尺。畳の寸法で部屋の大きさがきっちりと決められているのです。畳の寸法が定まっているからこそ、柱の内側から内側の寸法がピシャッと決まるわけです。ということは、同じ間取りなら柱と鴨居に囲まれた空間がどの建物も同じということ。要するに住まいの道具である建具の寸法がどれも一緒。ですから、畳と建具はどこに持っていっても使えたんです。

京都の建具屋さんでは、古い建具を集めていて、今でも一本から売ってくれます。もちろん京間でないと使えませんが、こうしたリサイクルが古くから日本家屋では成り立っていたんです。それが可能なのも、「寸法」というルールがきちんと決まっていたからで、だからこそこうした使い回しができたんです。ひと頃前までは、引越といえば畳と建具は持っていくのが当たり前、といわれていたのです。

そういう観点から見ると、畳や建具は道具であったとお分かりいただけるでしょう。そうした寸法のルールはその他の生活道具、たとえば布団なんかにも当てはまります。布団は、使わない時は畳んで押入に仕舞いますよね。その押入は1間分、畳1枚の幅があります。その片方の襖を開けて収納するわけですが、それがきちんと収まるように布団の幅も決まっているのです。1間だと4人分、半間で2人分の寝具を納めることができるように昔からちゃんと工夫されているわけです。このように、道具と建物の関係がきちんと裏付けを持って作られている日本の「住まう文化」。その関係は無駄のないとてもエコな心づかいに満ちていますね。

スキルアップ 稽古道 Skill-up

「パーチメントクラフト」

女性らしい感性と繊細さが生きる手工芸です。

パーチメントとは「羊皮紙」のことで、パーチメントクラフトは厚手の紙に繊細な細工を施したレースのようなペーパーアート。

まず半透明なトレーシングペーパーの性質を利用して下図案を白インクでトレース。エンボスペンという鉄筆でこすり白く濃淡をつけていきます。細かな針を刺してそれぞれの穴を繋ぐようにカットすれば、紙とは思えないほどの美しく繊細な作品の完成です。

文字を入れてグリーティングカードを作ったり、お気に入りの写真を入れてフレーム風にしたり、またビーズやスワロフスキーなどの綺麗な石で飾ればとてもエレガントな作品ができ上がります。